

入選

バスの中の青い水とう

鹿児島県

鹿児島大学教育学部附属小学校

4年 石原佳夏

「これ、どうすればいいのだろう。」

わたしは、目の前の青い水とうを見つめながら考えた。学校から帰るバスの中で、ふと通路の向こう側の席を見ると、青い水とうがごろんと置いてあった。この席に座っていた男の子は、1つ前のバスでいでおりにいった。

その子は、同じ学校だが学年がちがいで、見たことがない子で、水とうには名前が書いてあったが、聞いたこともない名前だった。わたしは、この水とうを運転手さんにわたすか、自分で持って帰るかなやんでいた。

そのとき、わたしは2年前のことを思い出した。その日は、同じ学校の子がバスにカサをわすれていた。わたしは、何も考えずそのカサを運転手さんにわたして、バスをおりた。家に帰り、母にそのことを話すと、母が言った。「そのかさ、持って帰ってくればよかったね。そしたら、明日その子にわたせたのにな。」それを聞き、わたしはしまったなあと考えた。

「よし、持って帰ろう。」

わたしは、その青い水とうを手に取り、むねの前にかかえてバスをおりた。水とうには、まだ水が入っていて少し重く、家まで歩いて帰る間、チャップチャップと水のゆれる音が、むねにひびいた。

家に帰り着くと、わたしを見るなり母が、「どうしたの、その水とう。だれの水とう。」と、おどろいた顔で言った。わたしは、「どうすればいいか、なやんだんだけど。」と、バスの中でのことを話した。母は笑って、

「持って帰ってきてよかったね。バスのわすれ物係にとどけられると、持ち主にもどるまでに時間がかかるかもしれないからね。」と言いながら、水とうをあらってくれた。

そして、学校へ電話をかけ、水とうを持って帰ってきたことを、先生に伝えてくれた。電話を切り、母はわたしに先生からの話を伝えた。

「水とうの持ち主は、2年生の子だって。明日、佳夏が先生にとどけたら、先生からその子にわたしてくれるって言ってたよ。」

わたしは、かわいた水とうを青い水玉もよりのビニールぶくろに入れ、明日学校へ持っていく手さげかばんの中にそっと入れた。

次の日の朝、学校へ着くと、真っ先に水とうを先生にとどけた。その後、わたしが校庭で遊んでいると、わたしの友達が走って来て、「先生が、佳夏ちゃんをさがしているよ。」と言った。わたしが急いで教室へもどると、ろう下に先生と小さな男の子が立っていた。

「佳夏ちゃん、この子の水とうだったんだ。ありがとうね。ほら、君もおれいを言って。」

先生にうながされて、男の子は小さな声で、「ありがとう。」とはずかしそうに言った。わたしは、照れくさくて、うなずいただけだったが「やっぱり持って帰ってきてよかったな。」と思った。

それからしばらくして、あの男の子がバスをおりるところを見かけた。かたからは、あの青い水とうがしっかりかかっていた。